

# 国際ワークキャンプ 初体験

最近「国際ワークキャンプ（ボランティア）」に参加した、参加したい、という若者が増えている。海外で、いろんな国の人と、協同するボランティアの現場や実際はどういうものなのだろう。中大生の体験記。



向野本則  
@イタリア  
(3列目左2人目)



則本友紀子  
@インド  
(中央)



中野才希子  
@山梨  
(右から2人目)

## 空手に喜ぶイタリア人、芸者に興味のスペイン人

法学部3年  
向野本則

### イタリア・カルスコ気温37度

朝起きたら隣でスペイン人が寝ている。もうそれだけでも感動！地球の裏側で生まれ育ったメキシコ人が同じ歌を知っていて一緒に歌う。それだけで気分は国際人！イタリアでのワークキャンプ体験を端的に表現すれば、「感動の連続」ということになる。

「37度」。ミラノから北へ列車で30分、カルスコの町は、温度計さえ湯気を上げているようだった。

昨夏のヨーロッパは異常気象で、各地で死者が出るほどの暑さだと聞いていたが、実際暑かった。身をもって「異常な夏」を知ったのである。トウモロコシ畑は未収穫のまま全滅していた。「これはひよっとしたら笑い事ではないのではないか？」と

思ったものだが、そこはラテンのノリである。現地の人たちは、「2カ月くらいまともに雨が降らなくて、雨乞い踊りしてるんだあ」と笑いながら屈託がない。イタリア人ってたくましい。

この町で昨年8月8日から2週間にわたったワークキャンプ体験。そこでワークキャンプを楽しむために必要なものは——と挙げてみる。

### 度胸とビートルズ

まずは度胸と積極性、そして日本を知っていることだと思う。日本に興味がある外国人は意外に多くて、うる覚えの空手の型を見せると喜んでくれるイタリア人、芸者に興味があるスペイン人など盛りだくさん。もちろん伝統文化だけでなく、日本のマンガは人気。ドラゴンボールとAKIRAはヨーロッパの常識！日本ではあまり有名ではないマンガも売られていてびっくりした。英語の歌を歌えるともっといい。ビートルズのポップな曲は知らないほうが珍しい。みんな知っているのだから

## 国際ワークキャンプWHAT?

経済学部3年 上條真之

**世界に広がるNGOネットワーク** 国際ワークキャンプとは——。いろいろな国の人(若者が多い)と一緒にあるテーマのボランティアをする。それを広く指している。キャンプといっても野外で寝泊りするのではなく、いっしょに生活しながら働くという意味だ。どのキャンプも平均2~3週間15~6人の構成で、世界中の企画に世界中から参加者が集まる。いったいなぜ、こんな多国籍な企画ができるのだろうか。そのヒミツは各国に広がったNGOとそれを結ぶネットワークにある。

たとえば、フランスのSOLDARITES JEUNESSES(SJ)というNGOがパリで社会施設の整備のボランティアを企画する。そして、SJは多くの国・地域のNGOが登録している国際機関に企画を提出して参加者を募る。すると、加盟NGOが各国で参加者希望者を集め、SJに紹介する。紹介を受けたSJは国籍、年齢、性別などのバランスをふまえ参加メンバーを決定。こうして多国籍なメンバーが集められるのだ。参加者も自分の国のNGOに申し込めば多くの国のキャンプを紹介してもらえる(私は2002年夏、パリでの国際ワークキャンプに参加し、社会施設のリフォームを手伝いながら、施設の地下にマットを敷いて雑魚寝する体験もした)。

**多種多様な企画** つまり国際ワークキャンプはどこか特定の大きな団体がグローバルな企画を展開しているのではなく、それぞれの地域の団体が調整機関を通じて世界と繋がるネットワークで成り立っている。とっていい。この調整機関には国連やユネスコといった機関の指導のもとに活動しているものもある。

また、各国のNGOが独自に企画をたてることで、地域色も強くなり、多種多様となる。フランスではフェスティバルの準備、ドイツでは環境整備、メキシコではウミガメの保護、タイでは文化交流といった具合だ。それぞれにそれぞれの団体の方針が色濃く反映される。

**80年以上の歴史、日本でも機運** 「国際ワークキャンプ」は1920年から始まった。第一次大戦のため廃村となってしまったフランスのある地方を、ドイツ人を含む若者たちが復興させたことが最初のワークキャンプとされる。その後、このメンバーたちが各国でキャンプをすることで世界中に広まった。冷戦下の東西間でも各種の活動は続けられ、最初のワークキャンプ団体は1987年に国連から表彰された。

国際ワークキャンプの動きが日本に伝わったのは戦後だが、当時はNGOやボランティアなどの社会的認知も低く、70年代にはその流れもいったん途絶えてしまった。

しかし近年、NGO活動が盛んになり、学生の海外への好奇心や、ボランティアの社会的関心の高まりから、日本でも国際ワークキャンプへの関心と参加が盛んになってきている。

「中大国際わ～きゃん情報局！」  
<http://hp.kutikomi.net/workcamp>



ないと、きつと「肩身が狭い」だろう。できたらいろんなバンドの代表的な曲くらい歌えるといっそう楽しめること請け合い。  
そして日本の料理を作れること、これも重要だと思う。焼飯を作った  
らなぜか拍手喝采で簡単な料理なのにちよつと得した気がした。それと

100円モノでいいから箸を20本ほど。最高のお土産になります。  
ワークキャンプでは基本的に英語で話すわけだが、語学力は向上するの  
のかという質問をよく受ける。この  
問いへの答えは少々難しい。TOEIC  
などのスコアに現れるような力はあ  
まりつかないかもしれないが、

コミュニケーションの道具としての  
語学力は確実に向上するだろう。も  
ちろん積極的に会話することが最低  
条件ではあるが。  
ワークキャンプでは日常生活では  
味わえない楽しみであふれていた。  
時々思い出してまたあそこに戻りた  
いなと思う。

文学部2年  
則本友紀子

## 「電波少年」的バスの旅

「このバスに7時間位乗っていきなさい。住所はここに書いてあるからね」

飛行機を乗り継いで一昼夜、迎えて来てくれたNGOのスタッフの人が一枚の紙を私に渡して、そう言った。まるであの「電波少年」的な衝撃である。やっと着いた、ほっと一息、つく間違えなく。

ブリキのおもちゃみたいなバスはIT都市バンガロールから、山中の小さな村へと私をワープさせた。イギリス、フランス、インド、日本、ホームステイ先にはなかなかの個性派のメンバーがそろった。

主な仕事は公園作り。こんなところで作れるの?と思ってしまうほどに、草はうっそうと生い茂り、た

くさんのゴミが落ちていた。まずは草刈りから始め、土を掘って運んで斜めの土地を平らにする。そこにバレーコート、ブランコを作り上げていった。過ごしやすい気温だったのだが……毎日が雨、雨、そして雨!泥だらけになって働いているのだが、この爽快さ!泥の感触さえどこか懐かしい感じがする。

ブランコの他に遊具を何にするか。毎晩行われるミーティングで、一番議論が盛りあがったテーマである。

材料は竹にしよう、と決まっても竹馬、竹ぼっくり、平均台など色々な案が出て、お互いに意見を譲らない。最後にはジャングルジムに落ち着いたのだが、そこにもオチがあった。ビックサイズ……! 中心になって設計をしたフランス人の彼は身長2メートル。彼用のサイズになるとは、皆もビックリである。

## 多国籍劇「三匹のこぶた」

地元の学校にもよく行った。一番

面白かったのは、6〜8歳ぐらいの子供たちに「三匹のこぶた」の話をしたこと。イギリス人の彼女が英語で言い、続けてインド人の彼がそれを現地のカナダ語に訳す。私も一人の日本人の彼女は前もって用意していたこぶたとオオカミの絵をそれに合わせて動かす。「ガオ〜」他の人たちは効果音だ。子供たちはキャッキヤ言いながらずっと目が輝いていた。最後に絵を全部片付けてから、ストーリーを思い出して絵を描いてもらった。「英語力とイメーヂ力を高めるのにはいいかもしれない」と、以前ラジスタンという場所で英語の先生を経験したことがあるイギリス人の彼女が提案してくれたアイディアだった。

生活を共にして気付いたのは、ワークキャンプはメンバー皆で作りに上げていくものだという事。人数が少なかつた分、一人ひとりの考えが活きていたと感じる。

コミュニケーションはジェスチャーでなんとかなるのだが、困っ

たのはインド英語の独特な巻き舌発音!これは英語か?とはじめは戸惑ったものだ。

食事。予想はしていたが、もちろん毎食激辛のカレー。といっても、日本とはだいぶ違う味だし、あらゆる種類の味がある。白、赤、緑、茶色、色も様々。強烈な辛さもなんのその。主食も色々であり、私はチャパティーとドサがお気に入りだ。

あと忘れてならないのが、仕事の後の、あま〜いチャイ。これは最高!村に一つだけある小さな喫茶店で、皆で仕事の疲れを癒している。地元の人たちが自然と集まってくる。友達を連れてきて誇りに紹介してくれるお兄ちゃん、自慢の愛娘をお披露目してくれるおっちゃん、お祭りの飾りをつくりに来ない?と誘いの声をかけてくれるおばちゃん。いつも、おちびちゃん達が恥ずかしそうに顔を覗かせていたのも可愛らしかった。みんな笑顔である。

私たちが造った公園。遊んでくれているかな?

## 国内で海外生活!?

「日本人な」

私の新鮮体験

中学部2年  
中野才希子

### 世界の若者in五右衛門風呂

山梨県牧丘町にある小杉農場。山と雲に囲まれたこの地に世界から若者が集まった。イタリア、カタロニア、スウェーデン、韓国から11人、そしてネパールと日本の10人が入れ替わりで参加。昨年8月、2週間にわたったワークキャンプである。

ワークは①パン焼き釜作り②縁側作り③土蔵の内装④デッキ修復など。大変さもあつたけれど、完成したときの嬉しさはこの上ない。大工道具にも挑戦。墨壺なんて初めて触った。

寝泊まりは、古い日本家屋（お風呂は五右衛門風呂である）。食事は各国料理を日替わり当番制で、パスタや韓国激辛料理、番外編はご飯に生クリームとシナモンを混ぜたスウ

エーデン料理など。ちなみに日本食……納豆は「臭い」とかなり不評でした。魚肉ソーセージは案外ウケた。毎日お箸だったから、しまいいにはイタリア人のお箸でパスタをすすする光景も。

会話はほとんど英語。ジョークも飛び交う中で初めは全く話せず困り果てたが、慣れと、協力してもらったりしてどうにかこうにか。適切な単語が思い浮かばなくても、「君が言いたいのはこういう事だろ」と助言をくれる。みな、英語が母国語ではないのである。中盤の1日だけ日本人は私ひとりの日があつたのだが、なんとか乗り切った。これ大きな自信になりました。しかし母国語しか話そうとしない女の子に苛立つてしまったのも事実。コミュニケーションが得意でないストレスは予想以上だった。話せなくとも努力や気持ちがあつても大切だと思う。

く、「月がく出た出た……」音頭を背にユカタ姿の人たちが「ただひたすら黙々と踊る」姿に驚いた様子。スペイン人の彼なんか盆踊りを空手の型と勘違いする始末。こう聞くのである。「足袋を履く人は忍者？」

### 日本人の日本知らず

後悔といえば、自分のユカタを持つていくべきでした。「家に置いてきた」なんて言ったときには、韓国の女の子からブライングの嵐だった。「着てみたかったのに」と。

問題点が無かつた訳ではなく、仕事に対する姿勢に疑問を感じたメンバーもいた。スペイン人は自覚はなくてもアジア人から見れば、陽気なばかりで働かないように見えた。もつとも、意見は言わなければ察してもらえず、「暗黙の了解」とはいかない。ほんの小さな疑問にも質問するし、納得いくまでとことん意見を出す。これが欧米の流儀らしい。「食事をどこでする?」。こんなことが、とにぎやかに意見沸騰である。

私は「そんなのどうでもいいじゃん」と、ちよつと疲れたりした場面。腹が減つても、エネルギーシユな外国人の人たちである。

ともあれ、時間に追われ周りを気にして暮らす「日本人な私」にとつて、ゆつたりマイペースで自分の考えをしつかり持った人たちの生活はとても新鮮だったといえる。

日本のキャンプに来る外国人は日本への興味も関心も高い。かねてから日本語や歴史文化を勉強していたり、柔道や空手をしていたり、日本人よりも詳しいほどだ。日本人こそ日本を勉強しよう。

日本キャンプの利点は気軽に参加でき、日本にいなながら様々な文化や考え方を知られるのに加え、参加費の安さにもある。いきなり海外は不安でも、その予行演習としてしまうには贅沢すぎる経験ができるし、私の場合2万円でおつりが返ってきた。とにかく終始とつても楽しくて、参加できて本当によかつたし、これをステップにこれからまた他のキャンプにも参加してもつとつと成長したい。